

＜若手の会＞活動報告

日本家政学会若手の会は 1996 年に発足し、今年で 21 年目を迎えた。本年は「家政学の魅力って？ー外から見た家政学ー」と題し、シンポジウムを企画した。第 69 回大会(奈良女子大学)の 5 月 28 日（日）9:00~10:30 に開催され、参加者は約 40 名であった。本企画は、「家政学の魅力とは何か」という問いに対し、第三者的な目で見た家政学、ご自身との専門との関わりをお話しいただくことで、若手研究者が家政学の魅力を再認識するためのヒントを得ることを目的としたものである。

講演 1 では、画家の ZAnPon 氏、アートディレクターのヨシ中谷氏に、教科書「楽しもう家政学」の改訂に際するブックデザインに携わるなかで感じた家政学の魅力についてお話し頂いた。当初、「家政学」について身近に聞いたことがなく、調べてもほとんど情報を得られなかったこと、その後、執筆者との打合せを重ねるなかで「生活に寄り添う身近な学問」としての魅力を感じるようになったことが紹介された。その魅力とは、それぞれの研究者が生活のことを真剣に考えている姿勢であり、それらを一人一人が語り、発信することの重要性が指摘された。その発信のきっかけとして、教科書の装丁を誰もが手に取りやすいものとする、ロゴマークとそれらを用いたグッズが提案された。

講演 2 では、立命館大学の Lata SHAKYA 氏に、ネパールから日本への留学とご自身の研究の変遷を通じて家政学の特徴をお話し頂いた。ネパールでは家政学という学問分野が確立されておらず、まず学士の際に学んだ社会的弱者のための建築デザインは新鮮な視点であったこと、修士課程の際、住居内だけでなく人との関わり・協同の視点から居住環境の研究を進めたこと、博士課程では、都市・地域の歴史や社会システムまで範囲を広げ、持続可能な社会に適合した居住空間のあり方を研究したことが紹介された。工学分野で研究を続けるなかで、「生活者目線」で考える視点が共有されていないことを実感し、それは、家政学の特徴として重要な研究スタンスであることが強調された。

講演 3 では、十文字学園女子大学の徳野裕子氏より、家政学部創設者の海外留学の影響と、海外からみた家政学の位置付けについてお話し頂いた。日本女子大学の創立者による家政学の使命についての論説より、「心の自由」「経済の自由」が重要であり、社会や世界の潮流と密接に結びついていることが紹介された。また、米国では、アメリカ家政学会の創設者が科学博士を取得し、女性の科学への門戸を開くと同時に、栄養学や健康、住環境など日常生活への応用が明示化されたこと、米国フロリダ州立大学の学部改変の経緯より、運動科学の導入、ビジネス経営への展開など常に変化を遂げていることを通じ、今後も家政学は新たな価値を生む改革（イノベーション）が重要となることが語られた。

パネルディスカッションでは、「家政学」の本来的な思想や言葉自体が消滅の危機にあるのではないかという指摘があった。これに対し、時代とともに変化を受け入れることの必要性と、そのなかで、これまでの学問蓄積を消滅させるのではなく、新たな視点や技術などを取り込んで発展させる重要性が述べられた。また、どのような分野においても、個人的な社会に対する強烈な問いを持ち、そのために学び続けるといふエネルギーがあれば、それが人に伝わり自然に広がるのではないかと指摘があった。「家政学」を知らない人々へのアピールについては、広告やデザインの力、SNS や Web ページなどの発信力、研究会を行う場所の工夫など様々な間口を広げる機会が考えられるが、その際、本質的な「哲学」としての学問をそれぞれの研究者が楽しく語ることの重要性が確認された。

今後も家政学研究の発展のための交流の場となるように、若手の会の活動を推進していきたい。

なお、アンケート結果の詳細および若手の会の活動については、日本家政学会若手の会 HP (http://www.geocities.jp/kasei_wakatenokai/) 上に公開している。

（若手の会幹事一同、 文責・野村理恵）